

ドイツに於ける英文学研究

阿 部 幸 子

ドイツの大学の文学部に於て、英文学科は現在、最も人気があるコースの一つで、学生数も年々上昇している。私是一九六九年現在約三千名の学生をかかえるハンブルグ大学の英文学科に、夏・冬の休暇を除く、二つのセメスターを通じて、ゲストとして在籍し、ゼミナールの討論等に参加する機会を一九六八年から九年にかけて与えられた。

ドイツの大学での生活は、一九六八年夏、ロンドン大学のゼミナールの一員として経験した研究生生活と同程度に充実した、又次に述べるような意味で、私自身の研究生生活の上で画期的な意味を持っていたと信じる。周知の如くドイツの大学は総て国立大学であり、学生は、*Abitur* 大学入学資格¹さえ取れば、どの大学に在籍するのも自由で、例えば最初の一年をミュンヘン大に二年目をハンブルグ大

に選ぶことは自由で、英文学科の講座内容、その他について、ハンブルグ大学の例は全ドイツの総てのそれと大差はない。だからドイツでの英文学の研究についてその情報を集める為に、全独の大学を巡礼する必要はないと思う。私のハンブルグ大での限られた経験は、この意味で日本の大学の場合と違って、ローカルなものではないと思う。

戦後に於ける学生の大量増加、それに伴う教授、学生間のコミュニケーションの不在、施設の不備等の問題は日本ばかりでなく、英独の場合も共通であった。しかし、その様な問題に対する積極的解決策がドイツの場合準備されており、その為学園には落ちつきとゆとりがあり、教授、学生の研究意欲は旺盛であった。私はこれからハンブルグ大学英文学科についての大略を説明しながら、ドイツの大学

での英文学研究が我々日本人にとって、どの点で有利であり、又どの点で不利であり得るかにについて述べ、参考に供したいと思う。

一、英文学研究は外国文学研究である

——日本の研究者に共通の問題——

当然のことながら、ドイツ人にとって英文学の研究は国文学研究とは異なる。日本の英文学研究者にとっていわば永遠の課題である諸問題の一つ即ち対象を英国人の感受性ではなく日本人の感覚で受けとめるのは正当か？ 日本の英文学研究者は本国の研究家の業績の後を追いかけて、乃至それらの紹介、模倣、テキストの翻譯等に満足しているのではないか？ 従って研究の上で original な見解が打ち出し難いのではないか？……といった問題に一つの解決への道を暗示してくれるのがドイツに於ける英文学研究の在り方であった。即ち多くの場合対象はドイツ文学を含む大陸文学との関係に於て、或は比較に於て追求され、日本に於ては比較文学と銘うって独立した講座を形成した学問研究の方法が英文学の研究の中に全く自由に用いられている。例えば一九六八年から九年にかけての講義題目の中から、特にこの意味で独特のアプローチを示していた講座を

列挙してみることにした。この年度の講義は十一ゼミナールは二十三であり教授二名を中心に外人講師五名を含む助教授、講師、助手によるものであった。最初に Borinski (ボリンスキー) 教授の、“Die Englische Kunst von der Renaissance bis zum Klassizismus.” (ルネッサンスからクラシズムまでのイギリス文芸) は独乙語による講義で、聴講者数約百、教授はスライド、映写をフルに活用されて、ルネッサンスからクラシズムに至るまでのイギリスの建築スタイルの変遷について講義されたが、この際一つのスタイルから他のスタイルに引き継がれるに際して、ドイツを始めとする大陸の建築のあたえた影響について説明され、その間、イギリスと例えばイタリアの建築との典型的相違を示された。そしてそのような差異が文学の上に如何に反映しているかという点にも言及されて、全体の印象としてはヨーロッパの建築史の一環としてのイギリス建築史の本質とその文学との関係という拡大なテーマを消化した有益な講義であった。

次に Haas (ハース) 教授による “Die Englische und Amerikanische Literatur-Versuch einer Motiv und Stoffgeschichte (イギリス、アメリカ文学—モチーフと題材の研究史) は、英米文学史というよりは、ヨーロッパ文学史と名

づけてもよい広い内容であった。この様な広範囲の対象を統一する為、文学史にあらわれる共通の題材、テーマ等に関連して、その誕生、発展、消長をめぐり、全ヨーロッパのスケールで考察を進められた。フアウスト物語、プロンユース物語その他に関するダイナミックな考察も興味深かった。とにかく、英米文学を偉大な伝統と背景の中の一部としてクローズ・アップされるあざやかな手際は、生涯を英米文学の研究に専心された碩学にして始めて可能な見事さと深い感銘を受けた。尚講義は総てドイツ語であったが、必要な場合には無論英語が混り、又随所にラテン、ギリシヤ語、仏語、その他のヨーロッパ語による引用があらわれた。学生は抵抗なく理解していたが、ヨーロッパ諸語の総てに通じていない私にとって、この点でドイツ人学生以上の苦労を経験したことも正直につけ加えておきたい。外人講師(英、米人)による講義の中にも、“American Institutions.” Boening 氏とか、“Comparative Phonology; English and German.” 比較音声学—英語、独乙語—といった、英国の大学では比較的聴講出来にくい内容に富み、その他、作品、作家研究の場合でも、作品に密着した研究と同時に、その周辺の問題、背景の研究が特に重視されていた。

その他若手の講師、フイंक(Fink)氏によるゼミナール、即ち、“T. S. Eliot im deutschen-Sprachraum.” (ドイツ語領域に於けるT. S. エリオット)は、七、八名の学生を対象とするゼミナールであったが、ここでは日本では当然比較文学へのアプローチとして取りあげられるテーマの扱い方が採用されていた。即ち、エリオットの作品が、ドイツ、スイス、オーストリアの諸国に於て、どのように受けいれられ、翻訳にはどのような業績があり、又、ドイツ語を用いる読者層に対するエリオットの紹介は如何であったか等という点を中心に、きめの細かい内容のゼミナールであった。その間、Ernst Robert Curtius (クルチウス)氏によるWaste Land (荒地) 訳、Das Waste Land 一九二七年版を原文と対比する作業に重点が置かれた。翻訳によって生じる差異について、又その差異が、どこまで必然的であり、どこに改善の余地を残すかについての研究であった。又トーマス・マン等のエリオットに関する批評の紹介もあり、又、ゼミナールの参加者全員にドイツの大学、劇場、出版社、TV、新聞業会、その他に於けるエリオットの過去五十年間の盛衰に関して個別に調査が依頼され、彼等は此の要求に熱心に応えて活動し、小さなゼミの集団から、ダイナミックな共同研究への足場が一步步築かれ

つつある様も身近に観察出来たことは、フィールド・ウェアを如何に学生に課すかという面で絶えず疑問を持ち続けていた私にとって、多くの有益な内容に満ちたゼミであったといえる。フイック氏の私観によれば、エリオットのドイツでの受容の方向を見定めることは、本国(英)では実現出来ぬスカラシップ(インタナショナルな)への貢献であると自信を持って指導をすすめていられた。

ドイツの学生にとって、日本の学生にはしばしば障害となる問題―即ち言語のハンディキャップ―は殆んど存在しない。従って彼等はドイツ語の文献を読むのと殆ど同じスピードで英書を読むことが出来る。だから、例えば英国の大学で行われている英文学研究のメソッドをそのまま彼等に適用しても、それを消化することは彼等にとって困難ではないと思う。それにもかかわらず、否寧ろそれ故にドイツの研究者は自己の特殊な立場……大陸文学に精通していること……を有利に生かして、独自の英文学研究を試みている。彼等はドイツ人である以上、英国人の感受性を身につけられぬのは当然と考える。だから、この種の問題で悩むことはない。要求されるのは彼等にふさわしいアプローチであり、課題の消化である。それ故、私が外国文学の研究者として長年抱きつづけた疑問―イギリスの国文学研究

者の後を追いかけていて果して満足出来るか―という疑問に自然に一つの解答が準備された形であった。かつて、私は自分の悩みの最善の解決を、比較文学の方法を採用するということに見出したと信じていた時があった。ドイツの大学に在籍中、私は、私が多年頭の中で暖めて来た方法とは決して独自なものではなく、その英文学科での伝統的な方法に似通ったものであることを発見し、百万の友を得た喜びを感じた。

尚ドイツでの独立した比較文学科は、南独チュービンガム大学にのみ存在し、ゼミナールは Prof. Wals を中心に行われているが、講座内容は、南欧文学即ちフランス、イタリア、スペイン諸文学の相互関係を考察するものであり、ドイツ、イギリスの関係を扱うものは今のところ存在しない事を附記しておく。従って、ドイツに於て、英独等北欧関係の比較文学を専攻したいと望む者は、ドイツの大学の英文乃至独文学科に在籍することによって、英文、独文学プロパーの研究者と同様の満足を得ることが出来ると思ふ。

このあたりで話題を転じて三千名という多数の学生と限られた数のスタッフとの間のコミュニケーションが如何に保たれているかについて言及したい。私は最初大学の大講

堂でハース氏による『英米文学史』を聴講した時、そして講壇上の一点としてしか後部の席から展望出来ぬプロフェッサーと講堂に満員の聴衆とを見つめた時、これが大学の講義であろうか、と一種異様な気持で周囲を見廻したことを記憶している。しかし、聴講の回を重ねるにつれて、三千名を一堂に集めた講義は『英米文学史』という広いgebietのテーマにふさわしい、即ち聴講者が多いことによって徹底を欠く性質のレクチャーではないことを次第に納得し、却って機械の助けを借りてこのような試みが効果を發揮している状態を大学側の適切な処置の一つの現われとして判断するようになった。無論黒板は用いられず、その代りに教卓上の用紙に教授がペンで書かれる文字が後のスクリーンに大写しにされ、そのスクリーンの文字は、最後部の席からでも鮮明にキャッチ出来、又マイクによる教授の肉声の変質も耳障りなものではなかった。

しかも教授は週一回の *Sprech Stunde* の他に *Gesprächsbende* を設けていられ、これは一九六八・九年度のゼメスターに於ては例えばハース教授の場合毎月曜日八時から行われ、学生はこの機会を利用して講義に関する疑問の点、不明の点等について教授と納得がゆくまで討論しあう特権に恵まれていた。周知のようにドイツでは日本の大学

で見られる様なクラブ活動の機会は殆どなく、又コンパに類するものも存在しない。その代りこのような *Gesprächsbende* に於ては教授と学生とが共通の学問的問題を中心に真剣な討論を交し、文字通り夜を徹しての意見の交換が行われる。日本の大学では殆ど見られぬ風景で、又教授、学生の両者が真剣に立ち向かう姿勢のあるところにのみこのような態度が生れると羨しく思った。

又、これは英文学科に限らぬ一般的な特徴であるが、教授は開講にあたって、ゼメスターを通じての講義予定、*Gesprächsbende* の予定、休講予定にいたるまで総てをあらかじめ印刷によって聴講希望者に配布される為、学生は長期に亘る勉強の計画を立てることが許され、従って教室での二時間の内容が極めて充実したものとなり得る点があげられる。これは合理精神を尊重する西欧の大学に或程度まで共通する特徴だが、秩序を重んじ、システムを尊ぶドイツの大学には特に顕著であり、私自身も見習いたいと思う点が多かった。又学生が教授から講義ゼミナーに關しての調査等依頼を受けた場合、学生は少々の調査上の困難を問題とせず、レポート等の作成を責任を持って実行する。毎週彼等が作成するレポートの内容が、日本の学生が一年間費して完成する論文のそれより質的に優秀である事実

は、彼等の勉学意欲の旺盛なことを物語る。学生個々人に於ける専門家意識と責任感の強さは必ずしも彼等の年令が特に男子の場合、日本の学生の年令より二、三才上であることにのみ原因するのではないと思う。

次に一言した如く、ドイツの英文学科に於ける講義、ゼミナールは外人講師によるものを除いて殆ど総てがドイツ語で講義される。従つて英語以外にドイツ語を或程度まで自由に使いこなす能力がないと聴講の意味はなく、英語以外を直接必要としないイギリスの大学での研究よりも困難を増す。それにもかかわらず一九六八—一九六九年現在、英文学科には他のヨーロッパ諸国をはじめとして、アジア、アフリカからの留学生、研究者の数は多く、アメリカ人の聴講者すら珍しくない。故に、日本の英文学科とは比較にならぬインタナショナルな雰囲気恵まれ、この事実がゼミの討論の内容を豊かにした場合もある。例えば一九六八年七月まで行われたアメリカ人客員教授によるゼミについて一言しよう。同教授のゼミの主題は、E. A. Poe (ポー) で聴講者約十五名中アメリカ人(一)、仏人(一)、日本人(一) Ⅱ私Ⅱの三名が居た為、ポーをめぐる討論はしばしば聴講者のヴァリエティに適わしい内容を持った。ポーの作品の翻訳がフランス、スイス、その他のヨーロッパ諸国で如何

に受容されたか、又翻訳によってヨーロッパ語のいずれが一番不利をしのばねばならぬかといった問題にまでテーマは波及した。私もポーの作品を日本訳した場合生じる問題等に関して、話をまとめ発表することを依頼されたこともあり、それに関して日本語の資料の不足を嘆いた経験がまだ記憶に新しい。これはドイツの英文学科で教える外人教授が、聴講者の立場を理解し、又同時に主題に関する幅の広い解釈を目標としている一つの証拠として指摘出来るのではないか。

学生は殆どアルバイトをせず、又アルバイトをする時間的余裕は勉強の負担が多い為実際問題として彼等に存在しない。尤も夏休み等、研究を兼ねてイギリスに仕事を求める学生もいないわけではない。しかしこの場合もバイトは手段としてしか意味がない。ドイツ、イギリスは地理的に隣国で up-to date な英語の用法や、日常会話等の習得、乃至教室で学んだ理論の裏付けを求めての研究旅行等簡単に実現出来る。日本の研究者と比べてこの点大いに恵まれているのは彼等にとって幸運だと思う。

次に研究施設について一言したい。最近日本の英語教育に於ては、今まで等閑にふされていた実面の充実の為ダイレクトメソッドが広範に取り入れられしをはじめとす

る設備が活用されるようになったが、この面に関してのドイツの大学での現状は興味に価する。無論日本と同じく、外国語教育の為にテープ等は用いられるが、その使用法はあくまで機械本来の補助的立場を出るものではなく、特に言語研究を専門にする一部の学生を除いては器具の利用についての関心は非常に低い。これは英文学科の学生達がギムネジウムの段階迄に受けた英語教育が日本の場合とは比較にならぬ高度の内容であり、又学生は英文学科を選ぶ場合、英語のパーフェクトな智識を持つことを前提とする為、大学でL1を使用する必要は殆どないという特殊条件が幸いして、日本の場合と全く異なった結果を生んでいるからであるが、機械を過信しない智慧が背後に働いている為でもある。又学生の抱負は高く、専門に関する研究の上で自主性の強いのを特徴とする。従って学生は教授のリードを待たないで自己の独創を生かした研究を進め、教授に従属するのではなく教授と共存するという姿勢が常識となっている。学生数の著しい増加にも係らず学内で保たれている静けさは、総ての研究者が、共通の目的意識の下での共存を自覚しての生活態度を徹底している結果と受け取られた。

次に図書館であるが、ハンブルグ大に於ける英、米文学

関係の図書館は英文学、米文学にわかれて各一箇所ずつ独立しており、その他英文関係の蔵書は大学附属図書館の中にある英国図書館が利用出来る。蔵書に関して特記することとしては、イギリスの大学図書館に見あたらない書物、特に英独文学の関係を扱った書物文献の充実である。これは私自身にとっても非常に幸するところであったが、この方面の研究に特に興味ある研究者は、イギリスの大学よりドイツの大学で学ぶ方が効果的と信じる。尚読書室も早朝から夜八時頃までよく利用されている。室内で私語する者もなく真剣な学生達の勉強態度がよく表れていた。そして学生は自由時間の大半を図書館に過ごすのが常識であった。又研究者には総てに個室が配当されている為、一私にも展望のきく明かるい一室が提供されていた—スタッフは夜八時過ぎまで研究室に居残る場合が多く、研究者にとっても学生にとっても、仕事を家庭でする必要は特殊な場合を除いてはなく、この点大学を研究機関として最高度に活用している感じであった。

タイプ、ホトコピイその他もよく利用されていて、この種の機械のリザーブも多く、学生の便宜が計られているのは当然のこととはいいながら、いささか羨しい印象を受けた。

先に一言したように、ドイツの英文学科学生に於ては、男女の別を問わず、研究に対する積極的意欲が旺盛であると同時に、専門の智識を将来生かす為の慎重な計画が立てられている。ただ何となく英文学科に進学したという種類の学生は従って殆ど皆無である。私が日本語を教えていた一人の英文学科女子学生に、大学を出て仕事を持たない女子学生がいますか、と質問した時、仕事をしないのなら、何の為に大学で専門の智識を身につけるのですか？と逆襲され、社会環境の相違によって同じ理論が通用しない日本の現状をいささか淋しく思ったことがある。英文学科を卒業した女子学生の就職先として一番一般的なのは、ホルクスシュレー、ギムネジウムの教師であるが、現在教員不足に悩む西独でのこの種の就職は広き門であり、学生達が就職問題に頭を悩ますことなく研究に専心出来るという利点も、日本の場合と異なった特徴であった。

三千名という大量の学生を収容する英文学科に於て、学生の相互間の乃至は教授、学生間の連体意識とか意志疎通などという問題は特に強調されていない。新しいゼメスター毎に新しい地方から集まって来る新しい学生を迎え、従って絶えず新しい学生を対象とする教授、研究活動が要求されるにも係らず、英文学研究という共通の主題の下に、

研究者相互の統一が保たれている雰囲気は、日本には珍らしいと思う。教授スタッフの真剣な研究態度に影響されて、新しい学生も無言のうちに学問研究への姿勢を教えられ、コミュニケーションの場が生まれる。教授、学生両者の質の低下がない限り、両者間の尊敬と信頼の念が自然に保たれるのは当然であらう。

以上簡単にハンブルグ大学英文学科の内容を紹介してみたが、ドイツに於ける英文学研究が日本に於けるそれより有利と思われる点について、重複する個所があるかも知れないが、次に箇条書きでまとめてみたいと思う。

一、研究者が英語、英文学について持つ智識は深くかつ広い。

日本の英文学会、その他の集まりで、研究者同志の自己紹介が行われる場合など定ってお互の研究領域の事が真先に話題になる。それによつてA研究者はシェークスピア学者、B氏はチャールサー学者であるとの評価が下され、彼等が、シェークスピア、チャールサー以外について、たとえ全く無智であってもそれは当然のことと受けとられると同時に、又彼等自身も自己のgebietを限定、紹介することに一種独特の満足を感じているように見える。専門化の進んだ今日、一人の作家、作品に生涯を打ちこむことだけでも大変

なことは当然だ。しかし、それだからといって自己を英文学の教師と名のる以上は自分の直接の研究対象でない作家、作品に対しても、それに関する智識と正当な批評眼が要求されるのは当然ではないだろうか。このことについては日本でも常々疑問に思っていたが、ドイツの大学で總てのスタッフに共通する広いかつ深い英米文学全体についての智識と識見に身近にふれるにあたって、私は目を開かれる思いであった。昨年のゼメスターでテョーサーを担当された同じ教授が今年度はシェークスピアを、そして来年度は現代英文学を、あざやかにこなしていられる様を観察するにつけても、日本のセクシヨナリズムはやはり余りにも行き過ぎではないのかと考えざるを得なかった。無論、英米文学の總ての両域に亘って相当高度なレベルに達している学生達を満足させ得る講義を行う為には、教師の才能は無論のこと、絶えざる努力が要求されるわけだが、教授スタッフの研究態度の真剣さは、そのような事情からも原因しており、又同時に、教授、学生間に於ける相互の学問上の協力体制が両者の研究の進展を助けている面も見落せない。誤解をさける為付言しておくが、教授達が、英文学全般に亘って識見が深いということは彼等が特に専門領域を持たぬという意味ではなく、逆に専門の領域を重視すると

同時に、専門以外の領域にも精通しているという意味である。このような態度があつてこそ、はじめて未だ日本では異端視されている比較文学の研究方法が歡迎される地盤が生じ、各教授が英文学を自国の文学、更にヨーロッパ文学の背景の下で把握しようとの困難な仕事に挑戦する勇氣を持たれるのだと思う。そして同時に、日本の英文学研究者の多くが本国の研究者と己とをひき比べた際味わう劣等感、少なくともドイツの英文学研究者に於てはその意味を失うであらう。

二、英文学の研究はインタナショナルな性

質を最も顯著に持つことについて再認識

有名なイタリア人の英文学者、マリオ・プラッツの下にはイギリス本国からの留学生も多数集まっている。ハンブルグ大の英文学科でも聴講者のバラエティはかなりインタナショナルで、学生達は大学の存在地とか、国とかよりも、どの教授に師事するかを眼目に自己の留学の場を定める。本国の英国に留学する人数が一番多い理由は、英文関係の優秀な専門家が当然本国に集中していること、若し言語の問題があれば、それを解決出来ること、又文学史の背景に親しく接することが出来ること等で、彼等は英文学研

究が英国でなければ充分に出来ぬといった狭い量見は持っていない。

この種の考えが支配的なのは寧ろ日本の英文学科ではないか。英本国の作品の紹介と批評の模倣、翻譯を研究者の仕事として長い間満足してきた、或は満足を強いられてきた伝統は未だに根強く人々の心を支配し、日本人としての独創的方法論、主題へのアプローチを求める姿勢は殆どなく、又たとえそれが存在しても、主流から分離した一人よがりの努力として、それを一笑にふする如きムードがヨーロッパには皆無であるのに、不思議に日本ではその生命を保っている。

英国での日本人留学生が未だに語学のハンディに苦しめられて、結局貴重な留学の期間を語学習得の為に空費してしまう場合が多い現状を見つめる時、私はこの面でのハンディが皆無であるヨーロッパの英文学研究者と日本の研究者とを同じ平面で語ることとは酷だと思ふ。しかしそれにしても、日本人の心の狭さは単に言語の問題にのみ起因しているとも思われない。それは英国に於ける研究方法を唯一の正統な方法と有難がる視野の狭さ、本国の学界に何等寄与することなく、唯日本だけで通用する、ローカルで亜流の学問に甘んじている伝統的態度に責任の一端が存在する

と思えてならないのである。

三、研究の自由と職階別の問題

——実力本位であることの重要性——

ドイツの英文学科に於ける教授の地位は高く、イギリス本国の場合と比べてみても職階制についての意識は強いようであった。この問題はドイツの一部学生間の不満の種となっているが、私はこのいささか旧式な職階制の意識それのみをとりあげても、日本の場合よりはむしろではないかと思つた。何故なら、日本の場合と異なり実力のない者がスタッフになり得る可能性は皆無である為である。思想、性別、国籍などが原因で生ずる差別も少く、研究生活を進める為の平等の機会が総ての研究者に提供されている。従つて昨年のノートを今年も用いるといった非良心的な教授もなく、又たとえそのような教授が存在したところで、彼の講義を聞く学生は極く少数となる筈だ。

私は『英詩』を講義された或る英人講師の評判が非常に悪く、出席者も殆ど数える程しかなかった理由が、彼の講義は解説に終つて極めて独創にとぼしい。講義の一部は昨年の繰り返しである。『学生』の発言等であったことを思い出し、敢しい批評にたえてこそ、真のスカラシップ

の成長があると身につまされる。講義の内容に関して殆ど批評不在の日本の英文学科での研究と、絶えず一定の水準に達することを前提条件とするドイツの英文学科での研究の意味に差が生じるのは当然だと思う。一人の研究者が一人前になるまでに積まねばならぬ業績の重さに比して日本の研究者にかけられた負担は余りにも軽すぎるのではなからうか。私個人としては、ドイツの様に形式的でなく、又職階制の意識すら殆ど存在していないイギリスの大学の雰囲気により親しみを感じているが、たとえ形式が鼻についても、勿体振った態度に不快を感じる場合があっても、ドイツの英文学者達が専門家としての尊敬に価するが故に、彼等に対する好意を失うことは出来ない。専門家としての資格を欠く、専門家を多数かかえている日本の大学の英文学科が形式面に於ては、イギリスではなく、むしろドイツの大学から、そのボタンを借りている事実は全く奇異な印象を与える。ドイツ的形式主義をアカデミズムの実体から遊離させた上でそのままアクセプトしたのが日本の英文学科の実相だと非難されても私は多く返す言葉を持たない。

四、討 論

私は先に Gesprächsabends にいって述べたが、(1)で

は討論が研究者の生活にどのようなとりいれられているか概観してみたいのである。再びそれについて繰り返すのではない。前述の如く、三千名の学生に対する二八名の教官即ち学生一〇〇名に対する教官一名というハンブルグ大英文学科の現状は日本の私大などと比べても決して羨むべき状態ではない。しかし機能的な施設の活用、助手、秘書を含む研究補助に従事する人々の協力、三千名を一堂にまとめた講義の実施、その他により、スタッフの不足が研究、教授活動に支障をもたらさぬよう意識的努力が払われていた点を特筆したい。同時にゼミの定員制も厳守され、私の参加したゼミも数名から二〇名までの少人数で組織されていた為、教授、研究効果共に理想に近い状態であったと信じる。

ドイツの英文学科ではゼミに関する限り学生が主役で教授は脇役の区別を持っている。二時間を通じてフルに討論が行われるが、この討論の内容も決して討論の為の討論といった浅薄なものではなく、その日のゼミのリーダー役を引き受ける学生を中心に活発な意見の交換が行われ、それは教師、学生の別を問わず参加者全員の研究意欲増進に役立つレベルの高い内容であった。先にあげたT・S・エリオットに関するゼミの場合も、エリオットのドイツに於け

る受容調査にあたって、大学関係を受持った一女子学生は限られた時間にハンブルグ周辺の二、三の大学、即ちキール大学などを、交通費自己負担で訪問し、自己受持ち区域の調査を出来るだけ完璧にするよう努力した。彼女が調査の結果をまとめて教室で発表したレポートはそのまま書物に印刷しても恥かしくない優れた内容で、私も感動を覚えた。日本の大学のゼミで討論形式が成長しないのは日本人が控え目であり、謙譲の美德を発揮するからだとか、又日本人は自己表現の能力に於て伝統的に劣っているからだとか言われるが、私には討論形式を成功させる為には、その内容の充実が先決条件であり、その為にはゼミの参加者全員が、共通テーマを充分にこなし、理解するばかりでなく、個人々々が積極的に努力して問題追求を徹底することが必要だと思う。残念なことに、予備知識を欠く学生達を教室に並べるだけでは対話は生じない。アカデミックな討論は人数をかき集めるだけでは不能である。ドイツの英文科のゼミではこれが可能であった。彼等の真剣な討論に加わっていると、自然に主題に関して積極的に自己の見界を表明する意欲が湧き上り、二時間が矢の如く過ぎ去る。ロンドン大で経験したやはり討論中心のゼミと共に貴重な体験だったと思う。日本の英文科で本格的な討論形式が育つ

のはいつのことであろうか。

五、静 寂

ハンブルグ大では英文学科を含む文学部は新築の一二階建のビルの中に収容されている。英文学科の学生だけでも三千名も居るのだから、このビルで研究活動に従事する総員の数の多さは想像がつく。しかしそれにも係らず、何と静かな学内であろうか。学生達は黙々と一つの講義室から次の講義室への廊下を歩き静かにエレベーターに吸いこまれてゆく。広い図書館の内部にも静寂が支配し、時折中庭などにたたずめば、明け離れた窓からマイクによる教授の声が洩れて来る程度だ。ロビーでくつろぐ学生達の話し声も低く、笑い声、叫び声は殆ど耳になかった。これは建物の内部に限らない。ゲレンデの噴水の廻りに集る学生も黙って日光浴し、本に目を走らせる。彼等らは大学に一步足を踏み込んだ瞬間から、大学という社会が要求する秩序を自覚する、そして馬鹿騒ぎに時間を空費することを極度に嫌う。足音の反響する長い廊下づたいに自分のオフィスへ行き帰りする折など、私は日本の多くの大学で今失われてしまった静寂が、この大学を支配していることを羨しく思った。彼等の激しくひたむきな研究活動はこのような

沈黙を土壤として育っていた。文学に志す者は、多くの作家達が創作の時間に静寂、孤独を必要とするように、自らの強い個性を育くむ為の特別な雰囲気が必要とする。彼等にとって真に必要なのは無意味な雑音としてしか意味のない言葉を友人達と交すことではなく、自分自身との徹底的対話を行うことである。この様な対話の結果が集められる時、ゼミははじめてその真の存在理由をあらわす。音響を一切閉め出したオフィスに閉じこもって私は幾度となく、この大学全体を特徴づける静寂に、思索と独創の母体である静寂に感謝を味わったものだ。

以上簡条書にして来た条項はドイツの大学の英文学科に於ける利点の一部であるが、これによって、ドイツの英文学科の性質の一端だけでも明らかにすることが出来たとすれば幸いである。

我々日本の英文学研究者にとって、研究は今や従来の限られた枠から出るべきではないか。日本に於ける英文学研究がそのまま国際的な意味での英文学への貢献とならぬ限り、我々の研究は永遠にローカルな色彩を保つことであろう。ドイツに於ける英文学研究が、その独自の方法論と独創的主題へのアプローチによって国際的評価を得ているように、我々日本の研究者も、我々独自の方法を打ち出し、

それによって将来の世界の学界に於て発言の場を得たいものと痛感する。

付記

ハンブルグ大で日本文学科の図書館のお世話にもなったことをつけ加えておきたい。又日本文学科ベンル教授の好意により私に与えられた様々の研究上の便宜に関して感謝を忘れることが出来ない。日本文学科に於て客員教授として在籍された、本学の佐々木現順教授を通じて、大谷大学のインターナショナルな性格がよく認識されていたため、この点で、私に幸するところも又大きかったと思う。

(本学助教授・英文学)